

かつらぎ通信

Nagasaki

Fruit Tree Experiment Station News

No. 1

2004.9

びり新品種「麗月」



創刊のことば

長崎県果樹試験場長 寺井理治

場長

次長

総務課

研究企画室

生産技術科

育種科

病害虫科

長崎県果樹試験場は今年で50年目を迎えました。

昭和29年に長崎県農業試験場大村園芸分場としてスタートし、昭和47年に果樹試験場として独立するなどの変遷の中で、県下の果樹栽培者はもとより、農業団体や行政機関、他の研究機関等多くの皆様方のご支援、ご協力により育てていただきました。心から感謝申し上げます。

平成15年度からは機構改革により政策調整局へ移り、本県の地域特性を活かした戦略的なプロジェクト研究に取り組む新たな組織体制となりました。

多様化する消費者ニーズや、輸入果実の増大、国産果実価格の低迷など果樹を取り巻く情勢は厳しい環境下にあります。果樹経営の安定を図るための技術開発をさらに続けて参りたいと思います。

さて、本誌は果樹試験場と皆様をつなぐ情報誌として発刊しました。「かつらぎ」とはこの地の古い字名であり、ここで研修を受け果樹栽培の第一線で活躍する多くの生産者には「かつらぎ」の名が誇りだと言っていたと聞いています。もう一度初心にかえるという意味から誌名に掲げました。ご愛読ください。

今後も、皆様と共に歩む試験研究機関として、ご支援をいただければ幸いです

研究成果



ビワのビワサビダニによる新葉の茶褐色化・わい化症状と防除法

病害虫科科长 早田 栄一郎

E-mail esoda@pref.nagasaki.lg.jp

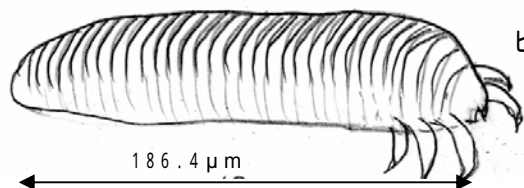
- 茶褐色・わい化したビワの新葉には多数のビワサビダニが寄生しており、ビワサビダニによる吸汁加害がこの症状の原因と考えられます。
- ビワサビダニは、ビワの果実にたてぼや病を引き起こす害虫でもありますが、ビワの新葉が茶褐色化して、わい化すると、樹の生育も阻害されます。
- このビワサビダニに対してピリダベン水和剤の散布により茶褐色化・わい化症状を防止できます。



図1 正常なビワの新葉



図2 茶褐色化・わい化症状を呈したビワの新葉



画 中倉

ビワサビダニの成虫(観察倍率 450倍)
体長: 0.18mm
体型: フランスパン様
体色: 透明に近い乳白色



図3 たてぼや病

表1 ビワの新葉に寄生するビワサビダニに対する殺虫効果^z

処理区分	倍数 (倍)	寄生虫数			
		散布前	5日後	13日後	26日後
ピリダベン水和剤	3,000	99	1	24	0
無 散 布	-	473	248	1241	1275

^z 薬剤散布は平成15年9月11日

^y 寄生虫数は調査12葉の葉表面右上半分の合計値

研究成果



ヒリュウ台「青島温州」の 着果時期・結実法

生産技術科 研究員 古川 忠
E-mail t.furukawa@pref.nagasaki.lg.jp

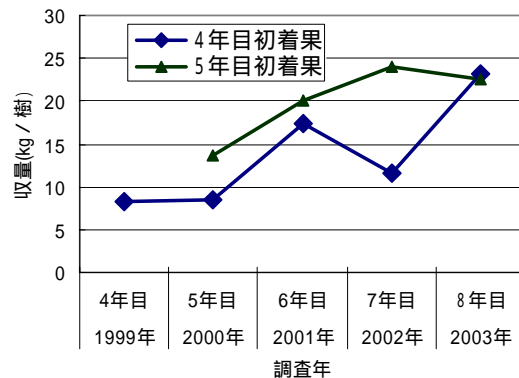
背景・ねらい

- 摘果、収穫労力の軽減や高糖度ミカンの生産安定にののために、わい性台木であるヒリュウ台木の利用が基礎的研究成果等から有効であると考えられます。そこで、ヒリュウ台「青島温州」の初着果時期、結実法、樹齢別に対応した栽培法等を検討しました。

幼木育成のポイント

- 一年生の苗植えつけ後は乾燥防止に努め、主枝候補を4～5本に決め、頂芽を1本にして伸長させる。
- 2年目は主枝を2～3本に決め他の同年枝は切除する。主枝には新しょうが20cm間隔程度になるように芽かきする。
- 3年～4年目は枝数増加を図る。

ヒリュウ台「青島温州」の初着果時期



初着果時期

十分な枝数を確保した5年生樹からがよい

ヒリュウ台「青島温州」の結実法



ヒリュウ台

カラタチ台

台木の異なる「青島温州」初着果年の結実状態

初着果年の着果は、樹上部無着果とし翌年の着果を確保する。

2年目は枝別摘果で20～30果/m³

3年目以降は、着果数30～35果/m³

樹齢7～8年生で中玉果中心で安定生産樹相

初年目葉果比40、2年目は葉果比30、3年目以降25～30

連携プロジェクトの取り組み



非破壊検査手法を取り入れた 農作物の高品質栽培技術の確立

育種科研究員 高見 寿隆

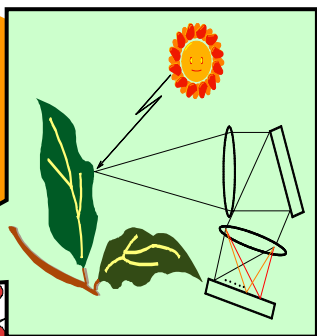
E-mail takami@pref.nagasaki.lg.jp

この研究は総合農林試験場や工業技術センター等との
連携のもとに行っている共同プロジェクト研究です

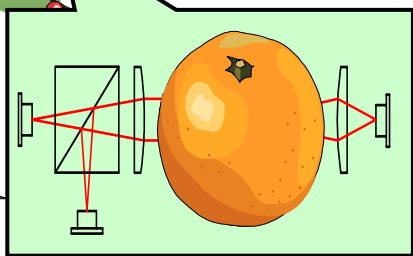
研究期間 平成15～17年

水管理の定量化
簡易計測手法の開発

灌水の指示

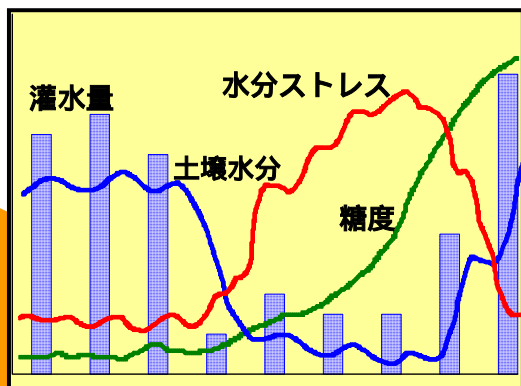


水分ストレス計



レーザー糖度計

非破壊
検査情報



水管理支援システム

高品質果実の安定生産

ミカン栽培では、美味しい果実を安定して生産するために水管理が大切です。この研究事業では、生長過程の水分ストレス量を簡易に定量的に把握する技術や果実糖度の変化を非破壊で計測できる技術を開発します。

そして、それらの装置を利用し、適切なタイミングで適切な量の水分ストレスを与えることができる水管理支援システムを開発します。

連携プロジェクト研究とは？

県（国庫）予算による複数の公設試験研究機関による戦略的研究テーマで、産業界および大学の参加を含む研究

果樹試験場トピックス



果樹新技術研究会を開催

6月24日に本年度第1回目の果樹新技術研究会を開催しました。研究会は大村地域を中心とした生産者に参加いただき、果樹試験場の新しい技術情報やスモモなどの試食、また 種苗法の改正に伴う果樹苗木の増殖や販売にかかわる改訂内容の説明を行いました。

あっ！ぷる取材

6月25日にNBCテレビ番組「あっ！ぷる」の取材を受けました。果樹試験場での研究の取り組み内容、特にピワ育種を中心に根角育種科長が説明を行いました。後日放映があり生産者や消費者から大きな反響がありました。



J A 県央中部ミカン部会女性部研修

7月6日に J A 県央中部ミカン部会女性部の皆さん50名が、温州ミカンのマルチ栽培や摘果方法についての研修のために果樹試験場を訪れました。そのほか J A ことのうみ女性部伊木力支部などウーマンパワーを感じさせる来場が相次ぎました

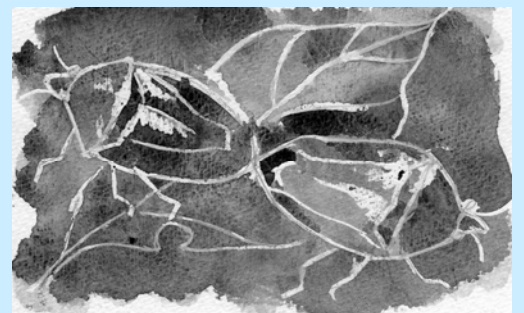
台湾からの視察団

7月21日に国立台湾大学教授や行政院農業委員会、中正基金会などで構成された「台湾カンキツ産業改革研究会」10名の視察がありました。本場の概要説明やほ場案内ののち意見交換が行われ、こちらからも台湾の果樹産業の現状など興味深い内容を聞くことができました。



果樹試験場よもやまばなし

薬剤試験のためにカメムシを増やしている。
カメムシの子づくりの手伝いは、狭いシャーレに入れるだけでよい。
広いカップだとすれ違いが多いからだ。
メス3匹 オス3匹の合コンスタイルで狭いシャーレに入れておくと、いつしかうまくカップルができて交尾に入る。
すぐに恋におちる素早さは現代っ子風。
交尾はおしりをくっつけたまま 中には8時間もそのままの長いペアもいる。 驚きである。
さて、卵から4日でふ化し、約30日で成虫となるが、餌は地元産の落花生。
飼育期間中に最も気を使うのは容器の移し替えである。隙を見せると逃げ出したり、臭い匂いを発したりする。まるで「おしめ」のとれない赤ん坊のようだ。
そのうちに匂いに慣れてくると、まるで我が子のように愛おしくなるから不思議だ。
しかし、大きく育ったカメムシ達もやがて農薬試験に用いられ、技術開発に寄与し、天寿を全うするのである。



画 嶋田義昭

ホームページをリニューアル！

長崎県果樹試験場 NAGASAKI FRUIT TREE EXPERIMENT STATION

- 試験場ニュース
- 研究トピックス
- 研究テーマ
- ながさき普及技術情報
- 研究成果情報
- 研究報告
- 農業技術プリズム
- 学会・雑誌への発表
- 果樹生育情報

- 組織図
- 場長室
- 研究企画室
- 生産技術科
- 育種科
- 病害虫科
- これまでのあゆみ



果樹試験場ではこれまでもホームページを開設してきましたが、より詳しく皆さんに知っていただくために大幅に内容を充実させて10月上旬にリニューアルオープンするよう準備を進めています。

果樹試験場の概要はもちろんのこと、研究成果や新しい研究の取り組みなどタイムリーに紹介していく予定です。画像を使用した見やすい画面構成となっていますので、一度アクセスしてみてください。

<http://www.n-nourin.jp/kashi/kashiindex.html>

試験場一般公開

今年も果樹試験場の一般公開を行います。ご来場、お待ちしております！

とき：平成16年11月13日(土) 10:00～16:00

ところ：長崎県果樹試験場

大村市鬼橋町1370 (JR大村線竹松駅下車 徒歩25分)

電話 0957-55-8740

内容：研究成果の展示

- ・ミカンとキウイフルーツの収穫体験
- ・くだものクイズラリー
- ・家庭果樹栽培相談
- ・果実即売 などなど

－ 編集後記 －

世間では市町村合併が進んでいますが、当果樹試験場もここ2年間で、これまであった施肥改善科、常緑果樹科それに落葉果樹科が統合され、「生産技術科」となりました。

そして、新たに「研究企画室」もできましたが、これは県の試験研究機関が横断的な連携や、大学や民間などとの共同研究を行いやすくするために、科学技術振興課のもとに試験場の再編が行われ、その調整のために設けられた室です。私も日頃は生産技術科に属していますが研究企画室との兼務です。

本誌は試験場をもっと身近なものに、もっと多くの情報を発信しようと「かつらぎ通信」と銘打って創刊号の運びとなりました。編集担当者としてご意見、ご指摘を糧に精進しますので今後ともよろしくお願いします。

(担当 谷本)